

開かれた「ブルネイ・ボルネオ研究」

日本・ブルネイ共同セミナー参加報告

2003年8月11～12日、ブルネイ・ダルサラーム大学の主催で日本・ブルネイ共同セミナーが開催された。セミナーの参加者は、日本、ブルネイ、マレーシアの各国から10名ずつ(日本からは9名)の29名で、歴史・文化、社会、言語のそれぞれの分野について報告と討論が行われた。

このセミナーのテーマは「ブルネイ・ボルネオ研究」だったが、報告はブルネイ/ボルネオの研究に限定されず、ブルネイ/ボルネオを含む地域が広く扱われた。例えば、日本人参加者による報告を見てみると、その対象地域によって、ボルネオ、マレーシア地域全体、オーストロネシア諸語の分布地域の3つにほぼ分けられる。それぞれが、順に、サバの原住民社会に関する報告、華人に関する報告、言語学の報告とまとめられる。言語学の報告については他のセッションとの重なる都合で参加できなかったため、ここではそれ以外のセッションを中心に報告したい¹。

*

山本博之

¹ 言語学の報告のうち日本人参加者によるものは、大角翠(東京女子大学)「Possesive Structures in Oceanic Languages: Neku and Tinrin Cases」、菊澤律子(東京外国語大学 AA 研)「The Two Genitive Clitic Pronoun Position in Some Extra-Formosan Languages: An Examination of Their Historical Development」、塩原朝子(東京外国語大学 AA 研)「Negation in Sumbawa」。

まず、華人に関する報告として、荒井茂夫(三重大学)による「Chinese Life in Borneo: A Preliminary Report of the Research on Chinese Movement in the Region」は、クアラルンプール、シブ(サラワク)、コタキナバル(サバ)の3箇所で中国系住民を対象に行った意識調査を分析したものである。この報告では、東南アジア各地の中国系住民の間で中国語教育と中国系としてのアイデンティティが強く、これらが結びついて東南アジアに特有の華人文化が成立する可能性があるかと結んでいる。

この報告にはアンケート調査の結果が添えられていた。その中でも特に興味深かったのが次の設問である。政治的アイデンティティを問われた際に、クアラルンプール(回答数69)では83%がマレーシア志向と回答し、次いでグレーター・チャイナ志向(13%)、シンガポール志向(1%)となっているのに対し、コタキナバル(回答数172)ではマレーシアを志向するのは58%と低く、グレーター・チャイナ志向が24%、シンガポール志向が18%となっている。この一方で、「マレーシア政府の民主主義が信頼できるか」との問いに対しては、クアラルンプール(回答数65)では「できない」と「あまりできない」をあわせて47%であるのに対し、コタキナバル(回答数110)では「できない」と「あまりできない」をあわせて12%となっている。

マレーシアからの参加者を中心に、この調査結果がマレーシアにおける「常識」とあわないとして、調査方法に関する質疑が相次いだ。その中には、クランタンやマラッカなどの現地化が進んだ中国系住民も調査対象として比較してはどうかなどの興味深い指摘もあったが、私がこの報告および質疑応答から感じたのは、英語あるいはマレー語を用いてマレーシアの公的機関に対して表明される中国系住民の意識と、中国語を用いて国外の調査者に対して表明される中国系住民の意識の「ずれ」の可能性である。確かに、調査方法を変えてマレーシアにおける「常識」とそう違わない結果を出すことも可能かもしれない。しかし、そのような努力とは別に、「常識」と異なる結果が出たことの意味を検討することも必要だろう。その意味で、荒井報告は従来のマレーシア華人研究に再検討を鋭く迫っているとも見ることができる。

同じく華人に関して、舛谷鋭(立教大学)「The Style of Borneo Literature: Wu An and His Group」は、サラワク出身の華語作家である呉岸(ウー・アン)が1950年代に書いた作品を分析し、これが確かに独立後のマレーシア華語文学に至る流れの1つであると結論付ける。その上で、1969年の民族暴動、そして1971年の国民文化の定義を経て、マレーシアにおいて華語文学は非マレー語文学と位置付けられ、これによってマレーシアの国民文学から疎外されたと指摘する。これに対し、舛谷報告は呉岸の作品が英語やマレー語に翻訳され、サラワクの青年たちに広く受

け入れられていることを挙げ、このような民族の壁を超えた文学活動の中にマレーシアにおける新たな文学の可能性を見出している。

*

サバ社会に関する報告として、上杉富之(成城大学)は、「Introducing a Transnational Perspective: An Alternative Analytical Framework for Understanding the Border Dynamics of Sabah, East Malaysia」において、「トランスナショナリズム」の視角による新たな分析枠組みを提唱した。上杉報告は、これまでサバ社会に対する学問的な関心といえばカダザン・ナショナリズムをはじめとするナショナリズム研究であったとして、サバ社会の研究において国民国家の枠組みが前提とされていることを指摘する。しかし、現実には人々が国境を越えて移動し、その上で国境をまたいだ関係を維持しているのであり、そのような状況を分析するのに従来の国民国家を前提としたアプローチは適切ではない。そこで、上杉報告は「トランスナショナリズム」の視角を提案する。その上で、サバにおける人の移動についていくつかの例を挙げながら説明し、カダザン・ナショナリズムなどを国民国家ではなく「トランス・ナショナリズム」によって捉え直すべきだと締めくくっている。

上杉報告にちょうど呼応する形となったのが、上杉報告と同じセッションでアジザ・カシム(サバ大学)が「Ditelan Pahit, Dibuang Sayang: Immigrant Population, Competing Interests and State Dilemma in Sabah」と題

して行ったサバ州における移民人口の扱いについての報告である。

実際に連邦政府レベルでサバの移民政策に参与しているというアジザ・カシムの主張は、要約するならば、移民であっても地元住民と文化的な共通性を持っていれば市民として受け入れるべきであるというものであった。その際に当然生じるのが、「文化的な共通性」をどのように捉えるのかという問題である。これは、イスラム教あるいはマレー語を受け入れていることを意味するのか否かという問いに加え、特にサバには華人と原住民の通婚によって生まれた「シノ原住民」が多数いることから、中国系移民の扱いをどうするかという問いも生じることになる。フロアからの質問はこれらの点に集中したが、アジザ・カシム自身にとっても連邦政府にとってもこの点が当面の問題であるとのことであった。

このほかに山本博之「Muslim Brotherhood in the Malay World: Its Impact on the Muslim Society in North Borneo」は、1950年代にシンガポールで結成されたムスリム同胞団の活動がボルネオ地域に与えた影響としてバジャウ人アイデンティティの形成を指摘した。

日本とブルネイ／ボルネオの関係を扱った報告はほとんどなかったが、そのような中で、アブドゥル・ラティフ・イブラヒム(ブルネイ大学)はブルネイと日本の王制(天皇制)についての比較研究を報告した。アブドゥル・ラティフは日本の「女帝」問題に触れ、マレー世界ではかつてアチェやクランタンのように女性がスルタンに即位した例も

あるが、ブルネイでは女性がスルタンに即位したことはなく、歴史的にも宗教上もブルネイにおいては「女帝」は誕生しないとの見解を述べた²。

*

どのセッションでも報告者とフロアの間で熱のこもった議論が行われ、日本、ブルネイ、マレーシアの研究者の交流という目的は十分に達成されたように思われる。その背景の1つとして、主催者が「ブルネイ・ボルネオ研究」を開かれたものとして捉え、ブルネイあるいはボルネオを専門とする研究者に参加者を限定しなかったことがあるだろう。初日の顔合わせでは「自分はボルネオの専門家ではないのですが」と言う人も多かったが、ほとんどの人が同じ事情であり、それぞれ異なる専門性を踏まえてお互いに話をするようになった。そのためもあり、ブルネイやボルネオについてもこれまで考えたことのないような見方をいろいろと伺うことができた。その意味で、このセミナーは私にとってJAMSのあり方を考える上でも大変有意義な機会となった³。

² このほか、筆者が参加できなかったセッションの報告に、杉本均(京都大学)「Higher Education Reforms in Malaysia and Japan: Similar Directions in Different Contexts」、上田達(大阪大学大学院博士課程)「The Task and Perspective of the Anthropological Research about Urbanization in Sabah, Malaysia」があった。

³ セミナーの全経費を負担してくださった三菱商事、およびブルネイ・ダルサラーム大学の唯一の日本人スタッフとしてセミナーの裏方を一手に引き受けてくださった佐藤宏文氏には大変お世話になりました。参加者の1人として深く感謝いたします。